

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

東京医科大学消化器外科・小児外科での国内外科研修を終えて

浜松医療センター消化器外科

原 貴信

この度、日本臨床外科学会国内外科研修により2019年8月19日から8月30日までの2週間を東京医科大学消化器外科・小児外科にて研修させていただきました。このような貴重な機会を与えていただきました日本臨床外科学会 跡見裕会長、国内外科研修委員会 高山忠利委員長、研修を受け入れてくださった東京医科大学消化器外科・小児外科土田明彦教授、永川裕一准教授をはじめとした医局員の皆さまに厚く御礼申し上げます。

肝胆膵外科においても腹腔鏡下手術の重要性は増しており、国内外で多くの施設が積極的に取り組んでいます。当院でも腹腔鏡下肝・膵切除を導入していますが、特に腹腔鏡下尾側膵切除については症例の集積を経て悪性疾患に対する適応拡大を考えており、このためには術野の展開方法を含めた技術・チームの成熟が欠かせないと感じておりました。そこで研修先を選択するにあたり、日本有数の膵切除件数を誇り、腹腔鏡下手術の実績が大変豊富な東京医科大学での研修を希望し、応募させていただきました。様々な学会等で永川先生のご講演を拝聴し、その丁寧な手術と論調に魅せられていたことが選択の決め手でした。

折しも2019年7月に新病院が開院したばかりであり、西新宿駅前という利便性はそのままに美しく生まれ変わった建物にまず目を奪われました。研修中は膵臓外科の手術につき多くのご指導をいただきました。2週間という限られた期間でしたが、膵頭十二指腸切除術5例（開腹2例、腹腔鏡下2例、ロボット支援下1例）、腹腔動脈合併膵体尾部切除術1例を見学させていただきました。実際に手洗いをし、術野にも参加させていただきました。永川先生が「うちの手術の特徴は展開だから」と繰り返しお話しされていましたが、各場面で術者と助手がしっかりと術野を展開・固定し、その上で精緻な解剖学的根拠に基づいて手術が進むという流れでした。定型化された術式、徹底した術野展開、その結果としての手術のスピードに圧倒されるとともに大変感銘を受けました。腹腔鏡下手術と開腹手術はともすれば別の手術のようにとらえがちですが、腹腔鏡の手技が開腹でも取り入れられるなど相互にリンクし、発展を続けているのを感じました。

また研修中は様々なカンファレンスにも参加させていただきました。関連病院を含めたskypeでのビデオカンファレンスでは、執刀医が手術の反省点を書き起こし、皆でそれを共有されていました。また学会予行では発表の先の論文化を見据えての追加検討、図表作成の指導が行われており、手術に対するこだわりはもちろん、その結果としての優れた成績、そしてそのアウトプットの過程を垣間見ることができました。空き時間には実際行われた過去の手術ビデオを供覧させていただき、また永川先生から術野展開や手術手技のポイントを講義していただけたことで、さらに理解を深めることができました。お忙しい中で開いてくださった食事会の際には手術以外の様々な話にも花が咲き、今後の診療に向けての元気をチャージさせていただきました。紹介患者さんも大変多く多忙を極める中でも、若手の先生方が皆様とても明るく、素晴らしいチームワークでかつ互いに切磋琢磨されながら仕事をされているのが印象

的でした。

今回の研修は短期間ではありましたが、多くの知識を得たこと、多くの疑問を解決できたことから非常に有意義で貴重な経験となりました。化学療法が発展し手術が集学的治療の一部を担うようになる中で、必要十分な外科治療をできるだけ少ない負担で患者さんに提供できるよう、今後ますます研鑽を積み重ねなければならないと感じました。先進施設での診療を実地で学ぶことの重要性を再認識するとともに、この経験を共有し、日々の診療に活かして参りたいと思います。最後に、不在期間中負担をおかけした当院消化器外科の先生方に、この場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

